

青山真也監督の映画「東京オリンピック 2017」

なかなか映画館に行くことができない。朝日 9 日夕刊で「五輪の影 奪われた住まいの記録」として、青山監督の映画を詳しく紹介している。このタイトルがすべての映画だ。2020 でもなく、2021 でもなく、なぜ 4 年前なのか。もう一つの、五輪の物語。80 分の映像に、ナレーションはない。カメラはひたすら、古びたアパートの部屋を映す。住人の多くが高齢者。にもかかわらず、肉体を酷使している。ある老人はベランダの室外機を動かそうとする。別の老人は部屋中の物を床に引っ張り出す。3~5 階建ての都営霞ヶ丘アパートには、エレベーターがない。1964 年の東京五輪開発の一環で建てた 10 棟約 300 戸の都営住宅で、東京の明治神宮外苑にある国立競技場（新宿区）のすぐ近くにあった。一帯はかつて五輪のための立ち退きがあり、家を奪われた人々の受け皿となったのが、このアパートだった。

排除は繰り返される。都は 2012 年、アパートの住人に退去を求めた。2 度目の東京五輪のためだった。これは、単なる引っ越しではなく、五輪の歓声の裏で排除される人々の日々を追ったドキュメンタリー。青山真也監督は、その影に光をあてた。カメラは生活のにおいを濃厚に写し取る。たとえば青果店の映像。アパートの中にあり、最盛期はたばこ屋、菓子屋、時計屋などとともに住民の生活を支えていた。高齢の住人のために、部屋まで店の人が食材を届ける場面は、アパートが単なる住宅ではないことを示している。すぐ近くには原宿や青山といった繁華街がありながら、時代からも周辺の街からも取り残されたエアポケットのような空間には、青山監督のいう「時空のゆがみ」が確かに表現されている。都は、立ち退きの期限を 16 年までとしたが、全員が去ることはなかった。自力で引っ越せない人もいたからだ。そして 16 年、アパートに激震が走る。一部の住人を取り残したまま、解体工事が始まった。振動と騒音。最終的には強制執行という形で 17 年、建物の撤去は完了した。周辺には高層マンションが新たに建った。アパートの跡地は公園になる予定だ。青山監督は、五輪に絡めたタイトルの意味をこう話す。「強制退去が、五輪への悲しい奉仕に見えたんです」。立ち退きを強いられた人たちを忘れまいと、タイトルに 2017 と刻んだ。全編にわたって抑制のきいた映像が続く。終盤、片腕の男性の引っ越す様子が映る。荷物を持ち上げられず、4 階から引きずって階段を一步一步下り、ひとりでリヤカーに載せる。男性の引くリヤカーは、ゆっくりと外へ。どこへ行くのか。後ろから、ユニフォーム姿でランニング中の若者の集団がさっそうと抜き去っていく。その男性が広場にやってきて、ラジオ体操の集団に加わるシーンが印象的だ。弾むような旋律とともに、映画は明治神宮外苑を映し出し、終幕へ。♪ 1、2、3、4—。エンドロールに流れる曲として、これほど普遍性のあるものを他に知らない。誰もが知るこの曇りなきメロディーは、観客を観客のまま帰ることを許さず、痛烈なメッセージとして響く。ある日住まいを失うこと。それもまた、自分の生きるこの国の現実なのだ。

(2021 年 9 月 12 日)